

Funeral Parade of Roses

a film by Toshio Matsumoto

starring Peter

鏡よ鏡
この世でいちばん美しいのはだれ？



ピーターより美しいビジュアル系(男)大歓迎!!

テアトル新宿で5月1日(土)、8日(土)の両日、ピーターより美しいビジュアル系の方(ただし男性のみ)は「薔薇の葬列」の入場料金が当日1,800円のところ1,000円に優待割引。
チェックは劇場スタッフが独断で判断させていただきます。

薔薇の葬列

脚本・監督：松本俊夫

撮影：鈴木達夫/美術：朝倉摂/音楽：湯浅譲二/松本プロダクション+日本ATG提携作品/
1969年/モノクロ/スタンダード1時間47分/ニュープリント版/配給：イメージフォーラム
出演：ビーター/土屋嘉男/小笠原修/城よしみ/仲村紘一/フランコ梅路/太田ササ子/芹
太郎/内山豊三郎/蛭川幸雄/東恵美子/小松方正 特別出演：秋山庄太郎/粟津潔/池
田龍雄/小島武/篠田正浩/藤田繁矢(敏八)/八木治郎/淀川長治

「薔薇の葬列」が良くわかる23のキーワード

『オイディプス王』：この映画の元となったギリシャ神話。そうとは知らずに父を殺害、自分の母と結婚して王になった男を巡る、テバイ王家の悲劇。フロイトの言うエディプス・コンプレックス(いわゆるマザコン)の語源。

ゲイボーイ：ゲイバーなどで男で男でありながら女として振る舞うことを職業にしていた人達。この映画では出演者に本物のゲイボーイを公募、6人が大きな役を演じた。ゲイボーイを演じるビーターは、むしろ元祖ビジュアル系としての魅力を放っている。

ゴーゴー・ダンス：90年代で言えばクラブ、80年代ディスコ、そのルーツが60年代後半のゴーゴー。どんな踊りかは映画でビーターが見せてくれます。

シャルル・ボードレール(1816-67)：20世紀文学で最も大きな影響を与えた悪魔的な耽美派詩人。映画の冒頭の言葉はその代表作「悪の華」の引用。

新宿：60年代は新宿が街として最も輝いていた時代(松本監督)。路上ではベトナム反戦の学生デモと機動隊がぶつかり合い、西口地下広場にはフォーク・ケララが出

発、バーではジャズが流れ、煙草の煙ももうの中、学生や文化人が口角飛ばして、映画やテレビを語りあう。西口の開店まももない京王、小田急のデパートも映画に登場。

新宿2丁目：新宿のゲイ・タウンは元々は三丁目だった。売春禁止法以前いわゆる“赤線”だった二丁目にその中心が移り始めたのが、ちょうどこの映画の時代。

チェ・ゲバラ(1928-67)：エディ(ビーター)の友人のフーテン「ゲバラ」の名の由来。ベレー型の戦闘帽にアゴ髭の精悍なキヌーブ革命の悲劇のヒーロー。当時の若者の多くが彼に憧れられ、そのファッションをまねた。最近ミュージシャンのTシャツの図柄などで再びブレイク。

ハブニング：寺山修司などの駅前や路上、住宅などなどで繰り広げられたケララの演劇が大流行。本編にはそんな過激なグループのひとつ、ゼロ次元が出演。

薔薇：ゲイ雑誌の名目「薔薇族」は、この映画にちなんだ名前だそうです。

原宿：50年代に駅前に高級マンション「セントラルアパート」が建ち、東京の最もオシャレの街のひとつに。映画のクライマックスではここでロケされた映像が圧巻。

ビエール・パオロ・バゾーニ(1922-75)：スキャンダラスな衝撃で世界の映画を揺さぶり続けたゲイ映画監督は、67年「アポロンの地獄」を発表。「薔薇」と共に奇しくも日本、イタリアで『オイディプス王』の映画化競作となる。本編にも「アポロンの地獄」のポスターが登場。

ビーター：六本木のゴーゴー・クラブで踊る姿がビーターバンのよう、ということからこのニックネームに。少なくとも当時は地相慎之介、というイメージではない。ビーターを見いだしたのは、美術を担当した朝倉摂さんと言われるが、抜擢したのは百人以上のゲイボーイと面接、ゲイバーの飲み代だけで数十万円の費やっていた松本監督。

ビートルズ：60年代といえどやっぱりビートルズ。66年の来日では武道館が大フィーバー。この映画は68年の彼らの解散のショックの中で撮られた作品。

フーテン：学生運動ほどクソマジメでない若者たちの反抗のひとつの形。長髪、ゲゲ、ぼろぼろのGパン、Tシャツ、汚いスニーカー(場合によってはゲタ)、手作りの装飾品などの定番のスタイルで脱力していた。マリファナなどを喫っているとカッコよいと思われていた(もちろん非合法)。ただプラブラしていただけじゃない…と思うけど。

ベトナム反戦：旧フランス植民地の独立が、東西対立の代理戦争に発展。60年代後半には事実上アメリカの戦争となって、北ベトナムの空襲も始まった。この戦争への反発が、チェ・ゲバラや毛沢東の文化大革命への共感と共に、若者たちの反逆精神と結び付いて世界中に広がり、学生運動の盛り上がり。

ホモセクシャル：この映画、ビーターの存在によって世の中の価値観は大きく揺らぎ変わることとなった。公開時の新聞には「恐ろべきゲイボーイ」「美少女ビーター」などの見出しが踊り、衝撃の大きさと混乱ぶりが伝わってくる。ちなみに当時、東京でのゲイ人口は60万人とされる。

ドラッグ：戦後日本のドラッグといえば覚醒剤(ヒロポン)だが、60年代のドラッグ・カルチャーを生んだのは、マリファナ、ハイイナル(睡眠薬)、アンフェタミン、ハシシなど。

三島由紀夫(1925-70)：51年に日本ゲイ文学の古典「禁色」を発表。マッチョな筋肉美に理想を求めた繊細な鬼才は、濫譯澤田編集の雑誌「血と薔薇」で写真のモデルにも。60年代に急速に右翼化。「薔薇」公開の翌年、切腹。

モノセックス：パンタロン、長髪の流行やビーターの大ブレイクのキーワードとして語られたのがコレ。ビーターも「女以上の色っぽさ」というホメ言葉に、むしろ「男でも女でもどっちでもいい」「女みたいと言われるのが一番嫌い」と少年っぽく答えている。

淀川長治：世界映画史上稀に見る、スターとなつた映画評論家。ユナト映画宣伝部長、「映画の友」編集長などを歴任、60年代に「サヨナラ、サヨナラ」の名調子でテレビの映画解説者として大ブレイク。「ヨドチロー」さんとして愛され、亡くなる直前まで活躍。本編にもゲスト出演しているので、お見逃しなく。それにしても若かった!!

60年代&70年代ファッション：パンタロン、モノセックスをキーワードに、体にフィットしたラインや鮮やかな色彩が眩しいデザインは、現代のモードでもロッキンガム。日本のビジュアル系バンドや「ヴァルヴェット・ゴールドマン」のドラムロックにも通じる「薔薇」の新宿ストリート・ファッションは必見。

60年代日本映画：松竹スーパーバーク、日本アートシアター・ギルド(ATG)の発展で、日本映画がもともと前衛アードしていた時代。ATGの「一千万円映画」の中でも最大の問題作・話題作となつた「薔薇」には「心中天網島」の藤田正浩や、日活の新しい青春映画の旗手、「八月の濡れた砂」の藤田敏八監督も友情出演。当時のATG映画の傑作4作品を5月22日のオールナイトで見ることができる。

六本木：当時は華やかなネオンや夜の雑踏はなく、ビーターらが踊っていたゴーゴー・クラブや秘密クラブのメッカだった。

●5月1日(土)よりテアトル新宿で『薔薇の葬列』をニュープリントでレイトロードショー

テアトル新宿(JR新宿駅東口・伊勢丹新館となり Tel.03-3352-1846)にて連日PM9:20から。料金：「松本俊夫全劇映画」共通特別鑑賞券1,400円、当日：一般1,800円・学生1,500円・シニア1,000円(税込)。初日5月1日(土)PM9:20より、松本俊夫監督舞台挨拶

●CLUTCH製「Funeral Parade of Roses:薔薇の葬列」Tシャツ発売!

「Funeral Parade Of Roses」Tシャツを5月1日よりテアトル新宿とCLUTCH各店で発売。ビーターの後ろ姿がキュート! 定価6,900円(税込)

●5月22日(土)、テアトル新宿にて「60年代ジャックATGオールナイト」

「薔薇の葬列」が制作された1960年代末の風俗や濃嵐に反映したATG映画の傑作を上映! 上映作品は「薔薇の葬列」、「初恋：地獄編」(羽仁進監督1968年)、「新宿泥棒日記」(大島渚監督1968年)、「書を捨てよ町へ出よう」(寺山修司監督1971年)、PM9:20から。テアトル新宿にて。入場料金は当日のみ2,500円。

●4月17日(土)よりキネカ大森で『修羅』を皮切りに連続レイトロードショー

キネカ大森(JR大森駅東口/西友大森店5階 Tel.03-3762-6000)にて、4月17日(土)~4月30日(金)「修羅」(ニュープリント版)、5月1日(土)~5月7日(金)「ドラ・マグラ」、5月8日(土)~5月14日(金)「十六歳の戦争」、時間は連日PM7:45から。料金は「松本俊夫全劇映画」共通特別鑑賞券1,400円、当日：一般1,800円・学生1,500円・シニア1,000円(税込)。初日4月17日(土)PM7:45より、松本俊夫監督舞台挨拶。